私たちはどこへ行くのか（1）

代表取締役　鈴木英介

「人新世」と言う言葉がある。最近テレビや本などで取り上げられているので、聞いたことがある人もいると思う。日本では斎藤幸平という若い学者が「人新世の資本論」と言う本を5年ほど前に出している。もともとはノーベル化学賞を受賞したパウル・クルッツエンと言う人が言い出したらしい。地球の地質年代において今「人新世」という新しい時代に入っているという観点である。

まずこの「地質年代」について説明しておく。

地球は今から46億年前にできた。私たちホモサピエンスは20万年から30万年前に生まれた。その内、何らかの記録、痕跡によって、人の行動や歴史が分かるのはせいぜい1万年だ。それを歴史時代という。それ以前、45億9999万年を地質時代という。地層によってその時代の特徴が分かるし、それ以外に分かりようがないからだ。化石などがこの地層に含まれている。そして化石によってその時代の生物などがわかる。あるいは気温や環境、地殻変動や隕石落下などの出来事も分かる。

地層は地球の歴史データなのだ。ただ歴史時代は地質時代の0.000002に過ぎないので一言で「地球の歴史」と言っても、私たちが考える歴史とは桁が違う事は覚えておく必要がある。千年2千年などは地質年代では誤差の範囲だ。

今は滅びた恐竜だって億の単位で生きていた事を考えると、人間の生きてきた時代は一瞬間にすぎない。その地球で人の影響で新しい年代が始まっているのではないかという事である。これを「人新世」という。ちなみに最終氷期が終わる1万年前より現在までを完新世という。

この人の活動が地質にも記録されている。明らかに世界各地の地層に人間の活動由来の痕跡が残されている。化石燃料を燃やした炭素、原爆実験のプルトニウム、マイクロプラスチックもある。世界中の地質に人間の活動の痕跡が記録されている。これが過去の隕石落下による恐竜絶滅に匹敵する影響を与えるのではないか。

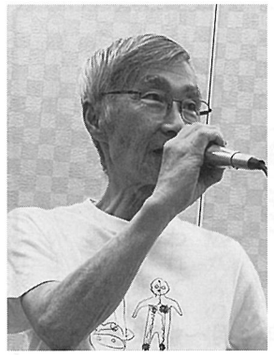
その変化は1950年位からだそうだ。

実はこの1950年と言う年は私の生まれた年なのだ。そう考えると大変な時代を生きてきたものだ。今年めでたく「後期高齢者」となり、「プラン75」（早川千絵監督の映画、爽194参照）の対象だ。

その1950年ころと現在では大きな違いがある。何といってもこのころの世界人口は25億人。現在はその3・2倍、80億人である。それだけでも大きな変化があるはずだ。

私が物心ついてから、大人になり社会に出るころまで、世の中では「3c」と言われていた。「カー、クーラー、カラーテレビ」の事であり、庶民の欲しいものの代表である。テレビは白黒で自家用車やクーラーは高根の花であった。

その白黒テレビで「クイズをあてて夢のハワイに行こう」という視聴者参加番組を見ていた。ハワイ旅行は庶民の夢であった。携帯電話どころか固定電話さえない家も多かった。電気は時々停電し、どこの家にもろうそくが常備されていた。裸電灯の下で丸い折り畳み式のちゃぶ台を囲み家族が食事をする。折り畳み式である理由は夜にはちゃぶ台を片付け、そこに布団を敷くためである。



経済の発達は社会を大きく変えてきた。

あるいは社会の変化が経済を発展させたとも言える。

以前は地球が太陽の周りをまわっているなどと言えば、異端として弾圧された。平民が学問をしたいと言っても不可能だった。現代では自由に物も言えるし、行動を妨げる人もいない。（一部の国ではそうでもないようだが）このような変化が経済の発達を用意したともいえる。新規技術は異端からはじまる。

この現代を不確実性の時代と言う人もいる。変化が速く、何が起こるか分からないからだ。

卓越した指導者もいない。はっきりした政治理念もない。善悪もあいまいな中で、膨大な情報だけが飛び交う。皆その情報を操作し、利益をはかろうとする。それが社会の権力者だけではなく、無名の一般人もそのゲームに参加する。誰が味方で敵か分からない。

ある意味、固定された階級や階層ではなく、全ての者にチャンスとリスクがある。どのような成功者でも明日の事は分からない。はっきりしている事は多くの情報をつかんだものが有利なポジションをとれるということだ。進むべき方向や、正しい理念がない以上その都度の判断が問われる。そこで正しい方向を判断するのが情報である。

この情報の分析を他人に委ねてはいけない。自ら検証した情報だけがその人が使える情報なのだ。情報には使える情報と使えない情報がある。正しいか誤っているかではない。誤った情報はそもそも情報ではないし、世の中には無用な情報が洪水のようにあふれている。

皆さんはこのような社会環境は、つい最近の新事態であると思うかもしれない。しかし理念や思想を世界中の人が共有するような時代は、ほんのここ百年弱の事ではないのか。人類史のほとんどは不確実であった。

紀元前の人である孫子が言っている。

人に勝ち、成功の衆に出ずる所以（ゆえん）の者は、先知なり、先知なる者は鬼神に取るべからず、事に象（かたど）るべからず、度に験すべからず。必ず人に取りて敵の情を知る者なり。（孫子用間編）

人に勝ち、成功を収める事ができるのは情報による。情報をつかむ者は神頼みや過去例、理念からの推測ではなく、必ず現場で実地調査する者である。

（鈴木訳）